

## 関西中国女性史研究会 編

## 中国女性史入門

— 女たちの今と昔

〈人文書院・二〇〇五年三月〉

中国女性史と銘打った書物の嚆矢は、一九七八年の小野和子著『中国女性史——太平天国から現代まで』（平凡社）であろうか。あるいはこれに先立つ一九七六年の岸辺成雄編『世界の女性史』『中国』（評論社）をあげるべきであろうか。当時の中国は文化大革命が終わったばかりで、国内では女性だけを取り上げた本を出版することなど考えられなかったに違いない。しかし日本の女性にとっては、世界に先駆けて男女同権を獲得した国として、中国はあこがれの対象だった。徹底した封建道徳の下で虐げられていた女性がいかんにして解放されたのか、女性はどうのように運動を進めたのか、日本側の関心はそこにあった。中国よりも早く日本で中国女性史が書かれたのにはこ

うした事情があったのである。

それから三〇年がたとうとする今、改革開放政策の下で、中国女性の地位の低下は止まらない。中高年女性に集中するリストラ、わずかな現金収入の道求めて都市に流れる出稼ぎの若い農村女性、「黄色娘子軍」と揶揄される性風俗産業の隆盛。いま解放という視点から女性史を描こうとすればマイナスの歴史になってしまう。そもそも中国女性史は解放されていたのか、という議論がおこるだろう。しかしそのことに意味があるとは思えない。

解放運動という視点にとられることなく中国女性生活の古今の事実を捉えなおすこと、本書の企図はそこにある。そのため年代別ではなくテーマ別の編纂となっている。全体は以下の八章で構成されている。

- I 婚姻・生育／II 教育／III 女性解放／IV 労働／V 身体／VI 文芸／VII 政治・ヒエラルキー／VIII 信仰

各章の扉には章の内容を概括する略

序が付けられている。各章はそれぞれ七〜一二の項目に分かれており、全部で七六項目。一項目は見開き二頁。そこに、本文のほか、一ないし二の写真やグラフ、研究案内（参考文献）も収められている。入門書として視覚的に訴え、一気に読みきれ分量となるように、記述は簡潔で内容も凝縮されている。更に、各章末に付されているコラムは、骨子のみの本文を拡充する読み物となっている。たとえば「ある女子学生の一日」には中国の若者の等身の生活が紹介されている。「魯迅と郭沫若の結婚」では、中国の近代文学の巨匠二人が旧式結婚と自身の恋愛の間でどのように苦悩したかが描かれている。また、「本朝列女伝」や「女紅」などのように、中国の女性観がわが国に及ぼした影響について論じたものもある。中国女性史は日本女性史を考えるうえで欠くことのできない一部なのだ。その意味でも本書を、中国や女性学に関心を持つ人に限定せず、ひろくすすめたい。

（編集部）